

個別学習支援計画書

氏名:見本 様(7歳)

参照知能検査:WISC-V 検査実施日:2025年1月19日

指標名	合成得点	90%下限	90%上限	記述範囲
知能指数 (IQ)	99	94	104	平均～平均
言語理解指標	97	90	105	平均～平均
視空間指標	100	93	107	平均～平均
流動性推理指標	100	94	106	平均～平均
ワーキングメモリ指標	94	88	101	平均の下～平均
処理速度指標	80	75	91	低い(境界域)～平均
一般知的能力指標	101	95	107	平均～平均
認知熟達度指標	83	78	91	低い(境界域)～平均

指標名	合成得点	90%下限	90%上限	記述範囲
量的推理指標	100	94	106	平均～平均
聴覚ワーキングメモリ指標	100	93	107	平均～平均
非言語性能力指標	92	86	98	平均の下～平均

【下位検査得点】

類似	10	平均	積木模様	12	平均の上
単語	8	平均	パズル	7	平均の下
数唱	10	平均	行列推理	10	平均
絵のспан	7	平均の下	バランス	10	平均
			符号	8	平均
			記号探し	5	低い(境界域)
知識	9	平均	算数	10	平均
理解	9	平均	語音整列	10	平均
絵の概念	10	平均	絵の抹消	6	平均の下

1.検査結果の概要

本児の知能の特徴は、全体的には平均的(年相応)ですが、処理速度だけやや劣るというものです。そのた

め、認知熟達度や非言語性能力も下がっています。基本的には、年相応の力があるので、言葉を使った教科学習、視覚的な力が求められる図形や図表、絵に関する問題、算数や応用問題など、どれも平均的にはできると思われます。ただし、処理速度の低さがあるので、単純作業を速く正確に行うことが苦手です。これは、板書をはじめとして、筆記が作業の中心となる学校生活、特に学習場面では、非常に大きなハンデキャップになる可能性があります。勉強自体が苦手なわけではないと思いますので、筆記や処理速度の低さから勉強が嫌になることがないように、できるだけ無理をさせずに、楽しく学べるペースを守ってあげることが何よりも重要になると思います。細かい点では、視空間、ワーキングメモリ、処理速度の下位検査間の差がやや見られます。認知の各要素内でも若干得意不得意が分かれるところがあるかもしれないので、意識していただくと、より効果的な関わりができるのではないかと思います。

2.各指標について

(1) 視空間指標

視空間指標は、視覚的な理解力を表します。紙面や画面上の模式図等の理解だけでなく、実際の風景や視覚に映るもの全般を理解する力が含まれます。本児の視空間指標は、「平均～平均」の範囲にあり、平均の範囲に位置しています。つまり、視覚的な理解力に関しては、年齢相応と考えられます。

処理速度以外あまり大きな差はありませんが、視空間は、本児が最も得意とするものの1つです。教科学習では、特に平面の図形や比較的シンプルな図表、理科や社会の絵を使った問題などが得意な可能性があります。得意な点を伸ばすのがとても重要なことです。視覚的な能力が発揮できる問題ばかりをやらせるのは難しいかもしれませんが、本児がやりたいと思えるドリルをやらせるなど、可能な範囲で、意識して、得意な部分を伸ばせると良いと思います。5教科以外では、図工の、絵画や貼り絵なども、視覚的な力が使えるので好むのではないかと思います。ただし、複雑な工作になると、ワーキングメモリや処理速度の力を必要とするので、図工全般が得意なわけではないはずで、好きな活動は、家でも取り組むと、楽しんで能力を伸ばすことができると思います。その他、絵本や漫画、図鑑、動画、パズルや間違い探しなど、視覚的に楽しめる活動には興味を持つと思いますので、家でも、視覚を生かした活動に多く時間をかけられると良いと思います。ただし、能動的な活動か、受け身的な活動かは区別して、できるだけ能動的な活動の時間を増やしたいところです。例えば、YouTubeで動画を見るというのは、非常に受け身的です。それに対して、ゲームをするということであれば、多少は能動的な要素もあるし、本を読んだり、さらに、絵を描いたりという、能動的な関わりが求められます。可能な範囲で、受動的な活動よりは、能動的な活動を増やせるとより良いと思います。

下位検査間に若干の違いがあり、図形を頭の中で操作するパズルよりも、実物の積木を操作する積木模様の方が得意そうです。処理速度の記号探しの低さや、ワーキングメモリの視覚的ワーキングメモリ(絵のスパン)の低さとも整合する特徴です。視覚情報の処理は得意だけれど、積木を動かしたり、ピースを重ねたり、実体のある活動に比べて、頭の中で想像して、物体を動かしたりして対処しなければならない活動は苦手になりがちと理解してもらえると良いと思います。色々な場面で、ただ頭で考えさせるのではなく、実体のある視覚的な手掛かりを示してあげると対処しやすくなるかもしれません。

(2) 流動性推理指標

流動性推理指標は、物事の立体的な理解力と、論理的な思考力を表します。これらの能力は、生活場面における問題への対処にとって必要なものです。本児の流動性推理指標は、「平均～平均」の範囲にあり、平均の範囲に位置しています。つまり、体系的・論理的に考える力に関しては、年齢相応と考えられます。

視空間と同様に得意なのは流動性推理です。年齢相応なので、他児と比べてずば抜けてできるということではありませんが、状況を多角的・俯瞰的にみて理解し、効果的に問題解決する力があります。教科学習では、算数全般（平面図形や単純な計算よりも、立体、筆算や方程式などの構造がある問題）と各教科の応用問題を解く力と関わります。難解な問題が解けるというわけではないかもしれませんが、中程度の難易度の応用問題であれば、解くことができると思います。私生活では、様々な問題解決に興味を示します。身近なものでいうと、ゲームが当てはまります。テレビやスマホ、ゲーム機で行うゲームの他に、戦略を必要とするカードゲームやボードゲームも当てはまります。他にも、謎解きなども好きかもしれません。言葉を使うものだけでなく、暗号の解読のような、パターンを見つけるクイズも楽しめるはずです。

(2) 言語理解指標

言語理解指標は、言葉を使う能力を表します。それは語彙力だけでなく、抽象的な概念の理解や、言葉を理解し、的確に言葉で説明する力を含みます。本児の言語理解指標は、「平均～平均」の範囲にあり、平均の範囲に位置しています。つまり、言葉を使う力に関しては、年齢相応と考えられます。

言語理解も本児が得意とする認知機能の 1 つです。下位検査間に大きな差もないので、語彙力や記憶力と概念の理解力のどちらも年齢相応にありそうです。教科学習は、国語だけでなく、全科目に関わります。暗記問題も読解問題もどちらも平均的にできると考えられます。日常生活でも、本を読んだり、文章を書いたりといった活動を年齢相応に楽しめるはずです。ただし、処理速度の苦手さがあるので、文字を書くよりは、本を読んだり、お話し中心の動画（YouTuber の配信など）を見たりといったことの方が楽しめるかもしれません。タイピングを身に付けることで、処理速度の苦手さを避けて、言葉を使った活動ができることが増えるので、タイピングの習得は早い方が良いと思います。

(4) ワーキングメモリ指標

ワーキングメモリ指標は、短期的な記憶力を表します。短期的な記憶力があると、物事を同時並行的に進めることができます（いわゆる並行処理）。WISC-V のワーキングメモリ指標は、聴覚的な側面と視覚的な側面の両方を反映しています。つまり、議論や口頭の指示への対応力や、複雑な設計図などを覚えて工作する力などが表れます。また、注意を集中し維持する力も関連します。本児のワーキングメモリ指標は、「平均の下～平均」の範囲にあり、平均の範囲かややそれよりも低い所に位置しています。つまり、並行処理や議論、注意集中に関しては、ある程度の困難が想定されます。

ワーキングメモリは、他と比べると若干点数は低いですが、ほとんど変わらず年齢相応の力があるといえます。ただし、若干下位検査間に差があり、聴覚的ワーキングメモリの方が高いので、視覚的ワーキングメモリはやや苦手かもしれません。ワーキングメモリ全般は、見たり聞いたりしたことを覚えておいて、その後の活動に利用する力です。教科でいうと図工や家庭科などが大きく関係します。それ以外にも、日々の勉強の進めやすさ

にも関わります。視覚的ワーキングメモリは、文章を読みながら内容を覚えておいて問題を解き進めるために必要です。一方で、聴覚的ワーキングメモリは、授業を聞きながら、その都度、指示を聞いて理解して、対応する場面や、グループディスカッションなどで話し合う場面で必要になります。本児の場合は、やや、前者の、見た内容を覚えておいて、その後の活動に使うという部分が苦手かもしれません。基本的には、苦手な部分については、できるだけその能力を使わないで済むようにするというのが、第一選択です。つまり、あまり多くを覚えなくて済むようにするということです。例えば、複雑な問題であれば、やるべきことを複数に分けて、1つずつ対処していくなどです。初めは、お子さん自身がわかるのは難しいと思うので、まずは学校の先生や保護者の方が、分けてあげて、徐々に、自分でも複雑な課題を分割して取り組めるように練習していけると良いと思います。

作文なども、行き当たりばったりの内容になりがちです。どちらかという聴覚的ワーキングメモリの方が得意そうなので、まず、各内容についてざっくばらんに会話をし、それを基に、要点をメモしてから書き始めると良いかもしれません。ただし、視空間の所で出たように、頭の中で組み立てることが苦手な可能性があります。要点のメモを頭の中で組み合わせて、全体像をイメージするのが苦手だと思われるので、あまり複雑な構造にせず、初めはこれ、次にこれとこれとこれ、最後にこれというような、シンプルな構造の計画を立ててあげると良いかもしれません。

(5) 処理速度指標

処理速度指標は、単純な視覚情報を素早く正確に処理する能力を表します。視覚認知、視覚と手の運動の協応、注意の維持、視覚的ワーキングメモリ、筆記技能が関連しています。本児の処理速度指標は、「低い(境界域)～平均」の範囲にあり、通常考えられるよりも低から平均の範囲に位置しています。つまり、単純作業の処理能力に関しては、ある程度の困難が生じる可能性があります。目で必要な情報を見つけるのが苦手なのか、単純作業に意識を集中し続けるのが苦手なのか、1つ1つ正確に処理したいので早くするのが嫌なのか、視覚と手の動きを連動させるのが苦手なのか、手先が不器用なのか、これらのうちいくつかを組み合わされているのか、人によって処理速度指標の低下の原因は様々です。

処理速度が、本児が唯一苦手とする部分です。処理速度が遅いと、板書や様々な手作業などを早く正確に行うことができません。また、時間的なプレッシャーがかかると、ミスをしやすくなることもあります。基本的には、先述の通り、苦手な能力はなるべく使わないで済むようにするのが一番です。処理速度については、板書は写真撮影にしたり、プリントを配ってもらうとか、作業は補助の先生に手伝ってもらって量を減らすなど、負担を減らすような配慮をしてもらえると良いと思います。また、テストや提出物が時間内に終わらない場合には、「理解していない」とみなされやすいので、口頭での説明、選択式の回答、タイピング、音声入力、写真提出など、代替手段で評価の機会が得られると、理解度を適切に評価してもらえることがあります。

家では、保護者の方が手伝ってあげることで、負担は減らせるかもしれません。めんどくさがっていたり、だらしないように見えることもあるかもしれませんが、その根本には能力の低さがあります。年齢相応を100とすると、8割の能力しかありません。あくまで目安ですが、実年齢が7歳だとすると、0.8をかけると、5.6歳です。それくらい幼いと考えると、手をかけてあげる必要があると思います。苦手なことが得意になることは基本

的にはありませんが、特に好きな活動をやっているうちに、苦手な要素を使うことで、苦手な部分も成長していきます。例えば、ゲームをやることで、単純作業を速く正確に、辛抱強く行う練習になるなどです。逆に、例えば、板書や漢字の書き写しなどを泣きながらたくさんやらせても、処理速度が伸びることはありません。得意なこと、できること、好きなことをたくさんやらせることを基本にしながら、無理のない範囲で苦手な部分も伸ばしていけると良いと思います。

(6) 一般知的能力指標

一般知的能力指標は、知能指数と同様に全体的な知的能力を表します。特にワーキングメモリ指標や処理速度指標が著しく低い場合に、一般知的能力指標は、知能指数よりも正確に全体的な知的能力を反映するといわれています。ワーキングメモリ指標や処理速度指標の影響がないために、純粋に内面の知的能力、思考力を示します。本児の一般知的能力指標は、「平均～平均」の範囲にあり、平均の範囲に位置しています。つまり、アウトプットの部分を除いた全体的な知的能力に関しては、年齢相応と考えられます。

本児の場合は、全検査 IQ も一般知的能力指標もほとんど変わらず、平均並みです。いわゆる賢さや、理解力は、年齢相応にあることが期待できると思います。

(7) 認知熟達度指標

認知熟達度指標は、実生活での活用や課題解決、作業の遂行といったアウトプットの側面を表します。本児の認知熟達度指標は、「低い(境界域)～平均」の範囲にあり、通常考えられるよりも低いから平均の範囲に位置しています。つまり、知識を利用する力に関しては、ある程度の困難が生じる可能性があります。

処理速度の低さに加えて、ワーキングメモリもやや低めなので、認知熟達度指標でみると、83 と低めです。アウトプットの能力が相対的に低いということは、本児が、実際の能力に比べて、相応の評価を受けにくいことを意味します。つまり、頑張っているのになかなか評価されないとか、本当はもっとできると思うのだけれど、なかなか評価に結び付かないということ、本児は日々経験しているはず。その結果、あまり頑張れなくなったり、「やりたくない」とか「めんどくさい」とよく言うようになるというのは、人間として自然な反応だと思います。教師や保護者、周りの大人としては、頑張れないことがあることを認めて、受け入れてあげて、大目に見て、本児のペースを尊重してあげることが重要です。本児は本児なりに頑張っています。頑張っていなかったり、怠けているように見えるときは、そうすることが、本児にとって必要な時かもしれません。できない部分ではなく、できている部分に目を向けて、少しでも楽しい時間や、前向きに頑張れる場面を増やせるように、サポートしてあげられると良いと思います。

3. 補助指標について

(1) 量的推理指標

量的推理指標は、数や量的関係について考える力を反映しています。暗算を含む文章題と重さを比較して隠れた規則を見いだす課題によって測定されます。日常生活では、買い物の計算、時間の見積もり、ゲームの点数計算など「数を手がかりにした問題解決」で発揮される能力です。本児の量的推理指標は、「平均～平均」

の範囲にあり、平均の範囲に位置しています。つまり、数について規則性を理解して適切に活用する力に関しては、年齢相応と考えられます。

量的推理も本児は得意な方です。教科では算数に関わりますが、日常生活でも、宿題が何個あるかとか、数に関する認識はしっかりしていると思います。ただし、計算ができることと、時間管理や持ち物の管理ができることは必ずしも一致しません。あと何時間あって、その中で宿題を何個やらないといけないかはわかって、実際に始められるとは限らないですし、数はわかって、時間感覚が正しいとも限りません。持ち物の管理も、何個持っているかを把握していることは有益ですが、それにより、必ずしも忘れ物をしないなどの管理ができるとは限りません。忘れ物や物忘れについては、WISC ではあまり測られない注意機能との関連が大きいです。つまり、量的推理は年相応にできるようなので、それが勉強の中でどのように役立っているか、日常生活でどのように役立っているかは、別途普段の生活を観察して検討しなければならないことです。例えば、ゲームやスポーツなどで得点を数えたりする際には役立っているかもしれません。このように強みが発揮できている活動があれば、それをできるだけ大事にすることが、強みを伸ばすために役立ちます。

(2) 聴覚ワーキングメモリ指標

聴覚ワーキングメモリ指標は、耳から入った情報を一時的に保持しながら、順序の並べ替えや計算などの操作を行う力を反映しています。数列を復唱・逆唱する課題や数字と文字を頭の中で特定の規則で並べ替える課題により測定されています。複数の口頭指示を一度に聞き取って作業する場面、読み聞かせの内容を理解しながら要点をまとめる場面などで重要になります。本児の聴覚的ワーキングメモリ指標は、「平均～平均」の範囲にあり、平均の範囲に位置しています。つまり、耳で聞いた情報を理解して活用する力に関しては、年齢相応と考えられます。

ワーキングメモリ(視覚・聴覚を含む)94 に対して、聴覚ワーキングメモリ 100 なので、視覚的なワーキングメモリがやや苦手だろうというのは、ワーキングメモリの部分で記載した通りです。聴覚ワーキングメモリは年齢相応なので、色々な活動を耳で聞きながら行うようにすると、よりよくできることは増えるかもしれません。例えば、漢字の書き写しや筆算、作文の宿題などは、書きながら音読します。そうすると、耳からも情報が入るので、覚えやすくなる可能性があります。ワーキングメモリはあくまで短期記憶なので、耳から覚えて思い出すことを繰り返すことで、長期記憶への定着を促したり、作文の作成を効率的に進めることができるのではないかと思います。他にも、複雑なことについては視覚的に示した方がいいだろうという説明をしましたが、簡単な指示であれば、いちいち視覚的に示さなくても、繰り返し言うことで伝わる可能性はあると思います。耳から聞いたことを覚えやすいという特徴は、色々な場面で活用できると良いと思います。

(3) 非言語性能力指標

非言語性能力指標は、言葉による説明を最小限に抑え、視空間課題や単純作業を通じて測定される「ことばに頼らない全般的な能力」を反映しています。積木模様、行列推理、バランス、符号などから算出され、図形の分析・構成、パターン認識、視覚と運動の協応などが総合的に評価されます。第二言語話者や言語発達に課題のある児童でも、能力が把握できる点が特徴です。本児の非言語性能力指標は、「平均の下～平均」の範囲にあり、平均の範囲かややそれよりも低い所に位置しています。つまり、ことばに頼らない対処は、ある

程度の困難が想定されます。

非言語性の能力は、パズル、絵のспан、符号が入っている分、平均の 100 よりもやや点数が落ちています。共通するのは、視覚ワーキングメモリにも関わる部分で、形や絵を覚えておいて、それを頭の中で操作して、対処するような課題がやや苦手ということだと思います。一方で、積木模様、行列推理、バランスは落ちていないので、目の前に具体的なものがあるって、その背後のパターンを想像しながら進めるような非言語的な課題は、それほど苦手ではなさそうです。つまり、視空間の所で指摘したように、ただ頭の中で考えることは苦手なので、できるだけ、目に見える具体的なものを手掛かりとして用意してあげると、課題はやりやすくなると思います。もしかすると、日課の切り替えが難しい場面がある場合には、宿題や日課を計画的に進めるために、少し未来の自分が宿題や日課を行っている姿や、理想通りに何かの活動を行っている姿をイメージすることが苦手なのかもしれません。本来、人間は、何をしたらどうなるかということイメージすることによって、その行動を行うモチベーションにすることができます。観察学習と近いものですが、もしかすると、この力が弱いことで、なかなか宿題に取り組めないとか、今行っている活動をやめられないという切り替えの問題が生じているのかもしれません。そのような場合には、活動場所に連れていくとか、宿題や、食事、歯磨きなどを準備して、手に持たせるところまでサポートするなどすると、行動のコントロールがよりやりやすくなる可能性があります。ポイントは、頭だけで考えさせるのではなく、視覚的な手掛かりを示すということです。

4. 終わりに

以上のように、本児の主な特徴は、全体的には平均的な能力を持っているものの、処理速度がやや劣るという点と、若干、下位検査得点間に差があるところでした。まずは、全体的に平均的な能力を持っているので、言語力、視覚的な理解力、問題解決力、見たり聞いたりしたことを覚えておいて活動に使う力は、年相応にあります。これが本児の強みなので、その力が発揮される活動で、興味を持って、楽しめる活動には、できるだけ多くの時間をかけさせてあげるのが良いと思います。それが人生を充実させるとともに、強みを伸ばすことにもつながります。

下位検査得点間の差としては、1 つは、ワーキングメモリについて、視覚ワーキングメモリよりは、聴覚ワーキングメモリの方がやや優れている可能性があります。書きながら音読したり、録音を聞くなど、色々な活動で、耳から情報を入れることを試してみると、より効率的に行えるようになることもあるかもしれません。もう 1 つは、パズル、絵のспан、記号探しに共通する側面として、覚えた視覚的な情報を頭の中で操作する活動が苦手かもしれません。場合によってはこの苦手さが、日課や活動を計画通りに進めることを難しくしている可能性もあります。うまくできないことについては、視覚的な手掛かりを用意してあげることで、できるようになる可能性があります。

本児の最も苦手な部分として、処理速度の弱さがあります。単純作業を早く正確に行うのが苦手だと思います。その結果、一般知的能力指標に比べて、認知熟達度指標が下がるという特徴も出ています。つまり、頭でわかってはいるけれど、パフォーマンスが伴わないということです。おそらく自分でも、「どうしてできないんだろう」と、歯がゆい思いを抱えている可能性があります。それでも、毎日頑張っていて、生活しているというのは、とてもすごいことです。苦手なものは、なかなかできるようにはなりません。処理速度が平均並みに高くなること

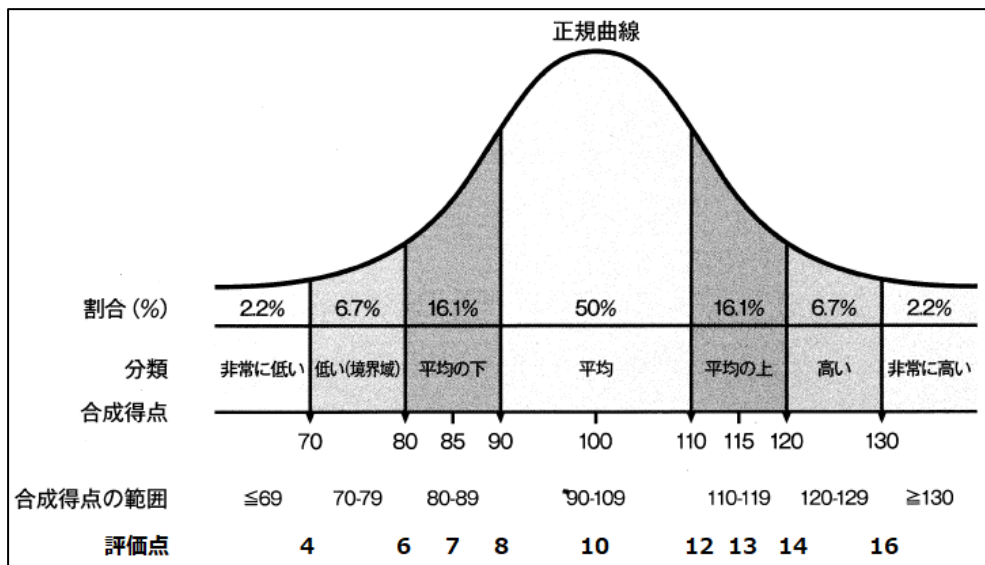
はあまり期待できないと思います。その影響をできるだけ少なくし、ハンデキャップを減らすために、学校に配慮を求めたり、できない部分を許容して、本児のペースで頑張らせてあげられるように、サポートしてあげられると良いと思います。繰り返しになりますが、重要なのは、苦手克服よりも、強みや得意を伸ばすことです。ぜひそれを意識して、日々の関わりを行っていただければと思います。

最後になりましたが、本学習支援計画は、あくまで、WISC-V の結果に基づいた内容です。基本的に、発達障害の特徴と WISC-V で測られる知能は別のもので、もし発達障害の症状を気にされていたり、それで困っていることがあれば、別途、医療機関でご相談されるようにしてください。

学習支援室世田谷つばき塾
代表 松本力哉

補足資料

図 1 正規分布について



※個別にお渡しする支援計画書では、この箇所に **検査課題一覧** を掲載します。ただし、検査課題の内容は事前に知って練習すると結果に影響する可能性があるため、HP 上のサンプルでは当該部分を非掲載としております(著作権・テストセキュリティの観点も含みます)。